

第1回 クッキー コミカライズ賞 応募用原作

この原作を基に、執筆された漫画をクッキーコミカライズ賞への応募以外に利用、発表することを厳に禁じます。

タイトル…無題

原作…宮川匡代

「こちらの指輪 ステンレスとプラスチックになります」

「は?! イヤイヤ プラチナ台にダイヤモンドって…」

貴金属買取店の査定員が申し訳なさそうに言った

「当店では買い取りはちよっと…デザインは素敵なので 日常使いに気兼ねなく お付けになれるかと」

マジか…ステンレスにプラスチックとは知らずに 大喜びで 6年も左手の薬指にはめていたとは かわいそうすぎるだろ 私……………

今日 ヤツに会ったら 叩っ返してやる

貰ったのはつきあいはじめて3か月目

(たとえステンレスにプラスチックの指輪と知っても あの時の私なら心から嬉しかった) 6年間 何度となく通ったヤツのアパートへ行く道を 歩きながら思った

この道を歩くのも今日で最後

「別れて欲しい 他に好きな娘ができた」

「……………へー」

「へーって」

「あーそう わかった」

「……………執着心ねえな それくらいの気持ちだったんだ」

は?! バカなの?!

そう言うしかないじゃん

泣きわめいてすがれって言うのか 今時 演歌でもないわ そんな女

突然 別れを切り出されて どんだけ取り乱したかったか

でも 取り乱したら負け男 (コイツ) つけ上がらせてたまるか

大学1年の時から6年

社会人になって 毎日のようにキャンパスで顔合わせていた 時と同じようにはできないけど お互い都合つけて 時間 作って 会って きたじゃない

新しい環境で 新しい出会いは 私にだってあった

この関係はずっと続くと思ってた

私達はうまくいっているよ

カップルが別れる理由

- 1 他に好きな人ができて
  - 2 浮気
  - 3 なんとなく
- (私調べ)
- まんまと 1位にハマったとは……

「連絡したでしょ まとめといってくれた？ アンタの部屋に 置いといた 私物置き服とか歯ブラシとか」

「うん 一応」

なに この 平常感 今日を最後に 別れるんですけど  
もっと バツ 悪そうに すると かしらよ

「ちよっと みりんと ナンプラー 入ってないじゃない 回収するよ」

「え？ そんなの ただの調味料じゃん」

「わかってないよね こーゆーとこに 元カノの 匂いが すんじゃん☆」

「あー そうなんだ」

元カノ……

私のことか あらためて 傷付きな おすわ

どんな女なんだろ 今度の彼女

私より 落ちる女でも いい女でも どっちでも イヤだな

ベッドの下に ヒモTバッグ 押し込んで いてやるか

「ねえ 紙モノの 写真なかったよね」

「ない 卒アルくらい？」

「じゃ スマホ出して 私が写っている 画像 全部 消去してよ」

「全部かよ」

「あつたりまえじゃん あとから なんか ヤバイの 流出したら こっちだって 困るんだよ」

「ヤバイのなんて ハ●撮りも してねーし……」

「いいから 早く！」

「なあ これ どこだっけ 熱海？」

「箱根だよ ロープウェイに 黒たまご 写ってんじゃん」

「あー そうだ 箱根 箱根 黒たまご 殻ごと 食ったら 長生き効果 100倍って 言った  
ら おまえ 本気にして 殻ごと バリバリ いてさ」

「言うな！ 純粹 なんだよ！」

「ハハ あ じゃあ これは？ 北海道？ ハワイ？ パリ？」

「北海道もハワイもパリも連れてつってもらってませーん❗」

「見て 見て おまえ 白目 白目」

「うるさいなあ 早く消去しなよ！」

「はいはい 消去 っと」

「.....」

目の前で 指先1つで どんどん 思い出が 消えていく  
なかったことになっていく

少しは 迷えよ 躊躇しなよ

「アドレスも アカウントもね！」

「女友達の アドレスも入っているからわかんないと思うけど」

「何言ってるの？ どんなに 混ぜ込んで あったって 勘付くもんなんだよ そもそも  
もう連絡とらないんだから必要ないでしょ！」

「まあ そうだけど」

自分で言ったことが 自分に返ってきて 痛い

でも 強い言葉を使わないと 自分を保っていられない

最初は少し 思い出話で盛りあがったけど

今は 黙々と作業を続けている

6年分のふたりの消去

現実感が どっと 押しよせてきた.....

「じゃ 私 これで」

「メシ食ってかね？」

いいけど そういう時間だし どうせ食事はするし ここから 電車で 5つ いったと  
ころのハンバーガーショップでしょ

好きだよ ね コイツのメシって ハンバーガーのことだもんね

「いただきます」

カウンターに横並びに座った

コイツの表情を見ないで食べるのは初めてだ

もう少しすると アレがくるはず

パンツをめくって ピクルスを指でつまんで 「ハイ」って

ピクルス抜きで頼めばいいのに 毎度 毎度 私が 食べてあげてた  
仕方ないな

「うま やっぱ これだな」

いつもの わんぱく食い みるみる 胃袋に投入していく

「……………」

なんだ

ピクルス食べられるようになったんだ

知らなかったよ

こんなことで ピクルス1枚で 距離を思い知らされるなんて…

「じゃあここで」

「じゃあな」

いつもの駅

私は上り ヤツは下りのホーム

向かい合ったホームで ヤツの乗車位置は決まっている

大きなちゃんぽん屋の看板の 決まって小さい “や” の前

(下ネタかよ…)

まだ帰りたくなくて 離れたたくなくて 泣き出しそうな顔

している 私を見て そこに立って 笑わせてくれた

何本 電車が 来ても ふたりして乗れなくて

やりすごしたこと 何度もあった

向かいのホームを見ると いつもの場所に ヤツが立っていた

バカだねえ そんな習慣付いちやって

もう やめにしないとね

“下りホーム電車が入ります”

電車がホームに入る瞬間 ヤツが肩先まで 手を上げた

「あつ…」

応えようとした時 電車に 遮られてしまった

“お下がりにください 発車します”

中途半端に上げた手を おろせずに 電車を見送ると

ホームにヤツはいなかった

いないのを確認したとたん ちゃんぽん屋の看板の文字が

ゆらゆらと ゆらぎ始めた

仕方ないよ 仕方ないよ こういうふうにはかできない

今日は よく我慢した

よく頑張ったよ

今は 幸せなんか 祈れない

早く別れる 不幸になれ としか思えないけど

いつか 穏やかな気持ちになれるかな

思い出したり 泣いたり ぶり返す風邪みたいに繰り返して

次の電車が来たら私も乗ろう

上りの電車でいこう

指輪の件は武士の情けで黙っててあげるよ

オワリ